キズナエピソード

雪舟エリザ　6話

//ADV形式開始

//陽彩の家・リビング

［エリザ」

「終わりったわー！」

［陽彩］

「おつかれー」

［とびお］

リビングから声が聞こえてきた。

ついに共同の論文執筆が終わったらしい。

ナイスタイミング。こちらもちょうど終わったところだ。

［とびお］

「お疲れー。雑炊出来たぞー」

［陽彩］

「腕を上げる気力がない。食べさせて」

［エリザ］

「とびお。ワタクシチャンサマも。あーん」

［とびお］

2人は倒れた状態のまま、口を開けて俺を見る。

まるで、餌をねだる雛鳥だ。

［とびお］

……仕方ない。俺は、雑炊をスプーンですくうと、

ふーふーと冷ましながら雛たちに食べさせる。

数十分かけて、ようやく2人を満足させることが出来た。

［エリザ］

「……とびお、ちょっと来なさい」

［とびお］

「なんだ？」

［エリザ］

「ん」

［とびお］

エリザに呼ばれたので、隣に座る。

するとエリザは、俺に抱きつくように雪崩れかかってきた。

そのまま、すーすーと小さな寝息を立て始める。

［とびお］

「おい、エリザ。俺は枕じゃないんだが」

［陽彩］

「珍しい。エリザが誰かにそんなに懐くなんて」

［とびお］

「そうなのか？

いつもこれくらい普通にしてないの？」

［陽彩］

「エリザは自由人だけど、

甘える人を選ぶくらいの常識は持ってるから。

……ふわぁ～。ぼくも寝るとするよ」

［陽彩］

「きみ、エリザが起きるまでいていいから」

［とびお］

「いや、こいつを家まで送ってくよ。

あ。雑炊余ってるから、後で温めて食べてくれ」

［陽彩］

「ありがとう。おやすみ」

［とびお］

そして俺はタクシーを呼ぶと、

エリザの家まで向かったのだった

//暗転

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

//エリザの家

エリザの家のインターホンを押す。

だが、誰も出てこない。

「あぁ、今日は家に誰もいないから……」

ようやく起きたのか、俺の背中でエリザが呟く。

かと思ったら、鍵を取り出して再び眠ってしまった。

「ったく、世話が焼ける……」

//次ページ

//エリザの部屋

俺はエリザの家に上がるとエリザを部屋まで連れていき、

ベッドに寝かせる。

「じゃあ、俺は帰るぞー？　おやすみなー」

帰ろうとしたその時、服の裾を引っ張られた。

見ると、エリザの手がギュッと掴んでいる。

//次ページ

「おい、エリザ。離せって。エリザ？」

呼びかけるが、起きる気配はない。

よほど強く握りしめていて、取るのも一苦労だ。

「本当に、世話が焼ける……」

あれだけ疲れていたのに無理に起こすのもかわいそうだ。

しばらく傍にいてやるか。

//次ページ

俺は、エリザの寝顔を見ながら時間を過ごす。

口を開けば憎たらしいことの方が多いが

こうして眺めている分には、ほんとうにかわいい。

「とびお……」

「起きたか？」

問いかけるが返事はない。

夢を見ているのか、ただの寝言だったようだ。

「とびお……のトリオ？」

「どんな夢だ!?」

//次ページ

……

…………

やがて、俺の瞼もゆっくり下がっていった。

//暗転

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//エリザの部屋

［とびお］

「う、うーん」

［エリザ］

「あ、とびお起きたわね？」

［とびお］

目を覚ますと、目の前にエリザがいた。

［エリザ］

「ずっとそばに居てくれたのね。

……ありがとう」

［とびお］

「おいおい、熱でもあるのか？

お前が殊勝に深々と礼を言うなんて……」

［エリザ］

「アナタは何もわかっていないのね。

大切な人にはありがとうって言わなきゃダメなのよ。

言ったでしょ？　恋人とライバルは大切にしなきゃ」

［とびお］

「……俺達ってライバルだったのか？」

「エリザ］

「そんなわけないじゃない！」

［とびお］

「え、じゃあ……恋人？　って、勝手に恋人扱いかよ」

［エリザ］

「な、なによ！　光栄でしょ？

このワタクシが感謝してあげてるんだから！」

=========================スチルカットシーンB開始=========================

［とびお］

エリザは俺の目を真っ直ぐ見つめたまま、

ほんのりと顔を上気させる。

［エリザ］

「……本当に感謝してるの。

ワタクシのワガママにも付き合ってくれるし。

ダメな時はきちんと叱ってもくれる」

［エリザ］

「困ったときは助けてくれるし、

なにより、ワタクシをワタクシのまま

受け止めてくれる……」

［エリザ］

「そんなとびおのことが好きなの。悪い？」

［とびお］

「いや、悪くはないけど……」

［エリザ］

「なら、ワタクシたちは恋人同士じゃない！

だから、ずっと一緒に居なきゃダメなんだから！」

［とびお］

「……わかったよ、エリザチャンサマ」

［とびお］

俺が肯定の言葉を返すと、

エリザの顔が真っ赤に染まった。

［エリザ］

「じゃあ、しなさいよ……

ワタクシに、誓いのキス……」

=========================スチルカットシーンB終了=========================

［とびお］

エリザがまぶたを閉じる。

俺は彼女の唇に、自分の口を近付けていった……。

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

//白い部屋

そこで意識が覚醒した。

「……あんな可能性もあったのかもしれない」

俺はひとりごちて、白い空間を眺める。

大きなスクリーンに、エリザとの思い出を幻視する。

//次ページ

ワガママで周囲を振り回すエリザ。

真面目な顔で論文に取り組むエリザ。

ライバルに負けて、悔しがるエリザ。

そして、心を許した相手に甘えてくるエリザ。

……そのどれもが愛しかった。

//次ページ

自然と胸の奥から気持ちが沸き起こってくる。

エリザを守りたい。

俺は心にそう誓った。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//6話END